

援助からビジネスへ～支援から協働 <その4>

日本の農業との協働

これまでも AAINews で何回も取り上げているように、国際耕種は岡山県牛窓地区において農業後継者育成や農業支援の活動を展開できないか模索中である。今回はこの牛窓における活動をベースにした「地域活性化モデル」を構想してみたい。

日本農業の大きな課題として、農業者の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加が以前から指摘されている。また、農業にもビジネスの視点や経営感覚が必要、あるいは作るだけではなくマーケティングが重要、という提言も言い古された感がある。

地域作りの「核」は人材であり最も重視しなければならない。その育成には地元のリソースを最大限に活用した手法を用い、後継者育成と地域の活性化を図る。後継者育成のための研修事業として、地元農家を講師として技術や知識、知恵を伝える「農業塾」を企画し、研修プログラムや研修教材の開発と研修実施を通した後継人材の育成を図る。研修コース案としては次のようなものが考えられる。

- (1) 農業初級コース（新規就農者対象の入門コース）
- (2) 農業中級コース（新規就農者、就農若手農家対象の中級コース）
- (3) 農業体験コース（学生・一般対象）
- (4) 家庭菜園コース（家庭菜園を楽しみたい一般向け）

また、就農希望者と後継者・援農者の募集先をつなぐような、インターネット上のマッチングサイトを運営することも考えられる。

農業経営面に対する方策としては、農家のグループ化による複業化や多角化を図るグループ営農を実現して、収入増加や経営の安定化をめざしていく。具体的には、消費者への安心・安全な食材の供給及び地元の食材を生かしたレストラン経営、農産物加工による高付加価値化、農業体験等と結びつけた観光業、エコツーリズムの開発等が考えられる。個別農家が多角化していくのはなかなか困難であったり、リスクが大きすぎたりするが、グループ化によってそれを低減させていく。

こうした後継者育成事業やグループ営農による多角化を進める過程を通して、地域における農家グループの形成をめざしていく。また、グループ化やそれぞれの活動を支援し、マネジメントしていくようなコンサルタント的な役割の組織も必要であり、このあたりに国際耕種が関わっていける可能性がある。さらに、こうした農家グループの存在によって、構成農家の農業経営をより確固としたものに支えていくことが期待されるとともに、グループによる地元資源の循環活用にもつなげていき、将来的には牛窓型の資源循環型社会の形成を実現する。

営農というのは、本来、「手段」である。活動を継続していくための経済的な基盤はもちろん必要であるが、単に儲かることだけをめざすより、存在すること自体に意義や価値がある仕事もある。“Profit”だけではなく、“Value”を追求するという営農の在り方もある。

あるアンケートによれば、老後は都会で生活したいと答えた人が 75%であったという。自分が住みたくなるような魅力的な地域作りをめざすこと。現在の日本のような高齢化社会の中では、そうした試みも求められているのではないだろうか。

